
諸刃のサクラ

clubtower

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

諸刃のサクラ

【Nコード】

N3332Q

【作者名】

clubtower

【あらすじ】

新人教師として西峰小学校三年一組を受け持つことになった宮下美香二十二歳。事件は、もう一年も終わろうとする三月に突然起きる。それぞれの家族の形、心の形を描いた作品です。

（前書き）

このサイトを最近知り、登録させていただきました。

ですので、サイト管理者様には大変失礼な投稿方法となっておりますが、

お読み頂いて、もしご興味等ございましたら文末に書いております私のブログのURLをつけておりますので、よければそちらからアクセスされてください。

記載URLの内容は商用目的、利益目的等ではございませんのでご理解ください。

また、このサイト管理者様ご判断にて、この投稿方法がNGである場合は、大変恐縮ではございますが、ご連絡くださいませ。当サイトの方針に従った登録に準じます。

以上です。

では、どうぞよろしくお願い致します。♪

短編微書

「諸刃のサクラ」 一章

＊＊西峰小学校三年一組教室＊＊

「あ、ねえ、ジヨウくん。ちょっといいかな？」

「カズか？ちようど良かった。いいぜ。なんだよ」

「いや、ちよつとさ……」

と、いつものか細い声で和久は丈太郎を二階にある教室から音楽室へ向う階段を下つて、一階の男子トイレに呼び出した。

「おい、次は音楽室だぞ。三階だぞ！なんだよ？」

「……うん。あのね。」

そういうと、次に使う音楽の教科書の間からスツとナイフを出して丈太郎の左の頬にあてた。

「ジヨウくん。き、君は、調子に乗りすぎなんだ」

あまりの突然さに、丈太郎は何が起こったのか分からずただ黙っていた。

「ぼ、僕はね、いつでも君を殺せんるんだ。わ、分かるよね？」

いつもは活発で明るい丈太郎も、さすがに小学三年生同士のやりとりには

重すぎたのだろう。今にも泣きそうな表情で和久の目を必死に見続けていたが、

ようやく声を出した。

「あ…俺は友達だろ？…お、お前と仲良くしてんの、お、俺だけじゃんか？」

「そ、そんな態度が気に入らないんだ」

学校では大人しくてどちらかと言えば冷静で無表情に近い和久は、若干の声に震えがあるものの、淡々と言葉を発した。

「許せないよ。ゆ、許せない。許せないよ」

「な、な、なにがだよ？ゴメン！ゴ、ゴメン…うっうっうっ…」

その変な冷静さが拍車をかけるように、丈太郎は声を殺して泣き出し、

その場に蹲ってしまった。

和久はその姿を見ても、笑うわけでも興奮する訳でもなく、バタフライナイフの刃を丁寧に閉じて

そのままポケットにしまい、ナイフを手にした時に落とした音楽の教科書を

広い上げ、トイレを後にした。

木造六畳のワンルーム

朝方眠りに就いた圭介は、夕方になってボサボサの茶髪と共に万年床から起きてきた。

「ふあゝあ、眠みい。昨日はマジでツイとらんじゃった・・・」

と呟きながらボリボリと頭を掻き、昨夜まで財布に入っていた八千円を思い出しながら

タバコに火を付けた。

高校を一ヶ月で中退した圭介は、喧嘩とバイクに明け暮れる毎日、それに見兼ねた父親は、知り合いの棟梁に頼み込んで、二十歳の誕

生日の翌日から

とび職人として六年間せつせと働いている。

初めは、キツイばかりですぐに逃げ出すつもりだったが、始めて三ヶ月が過ぎたあたりか、

大きなリフォーム案件で知り合った客の一人娘、美香と付き合いだしてからというもの

奇跡的に仕事も恋愛も奇跡的に続いている。

「おはよ」

「うわっ！ な、なんじゃっ！ 来とつたんか！？」

圭介は思わず加えていたタバコを落とし、慌てて拾い裸足で畳を軽く擦りながらまた口に加え直した。

「もう、汚いな！ って「来とつたんか？」じゃないわよ！ 圭ちゃんが映画見に行こうって

いうから来たんじゃない！

カギだって掛かってなかったし。 ってどうせ、また麻雀だったんでしょ？

まったく・・・朝までやって何が面白いわけ？」

「お前には分からんよ！ 唯一の楽しみぐらいいいじゃろが？」

「アンタ、パチンコも競馬もするじゃん」

「...あ、まあ」

と、このような相変わらずの会話が長続きする秘訣のようだ。

「っーか、まだ間に合うか？」

「今出れば多分間に合うわ。 ったく、ヤクザ映画の何が楽しいんだか。

こんなところ生徒に見られたら面倒だわ」

「何言ってるんだよ。 正義は勝つ！ って、最強の教育じゃ！ 分からん奴やのう」

そんなバタバタとした毎度の会話を繰り返しながら、二人は木造六畳のワンルームを後にした。

スーパーまるよし

『まっると良い品』いらっしやいませ。まるよしへ。』

毎日同じ顔ぶれの店員と客の店内で、丈太郎の母親、横川美智子はパートとして

レジ打ちをやっている。

「上条のおばあちゃん。今日は、七七七円になります。

あら？今日きつと良いことありますね？ふふふ」

と、明るい性格に加えて、四十歳過ぎには見えないルックスから美智子のファンは多い。

そうして、夕方のタイムセールがひと段落着いた五時を過ぎると、タイムカードを押し、

着替えて、余り物を安く買って自転車で帰宅する流れが月曜日から金曜日までの日課となっている。

しかし、その日は、急きょ人手が足りないということで、久しぶりの日曜出勤だった。

「佐藤さん、今日はなに？」

「お？みっちゃんか？今日はエビフライだな！」

「さっすが、佐藤さん！」

会話の相手は、まるよしの社員、主任の佐藤。

事実上、店舗責任者として任されている30代後半の男だ。

佐藤は、パートの奥様や学生のために、惣菜品を少し多めに作り、お肉の切れ端や野菜の

陳列できそうに無い物などを持って帰らせたり、安く売ってあげている。

本当は良くないが、社長の吉井もそれは黙認しているようだ。

「ビビビ・・・ガッチャン」

「あら、１５分過ぎっちゃったわ・・・」

「お？おつかれ。今日は助かったよ」

吉井だ。

「あ、社長。お疲れ様です。ちょっと、主任と少し話し込んでやって」

「そうか。でも、みっちゃんをよく働くね。本当助かるよ」

「いや、子供が三人も居ると、ね。しかも、家のローンがあつて、旦那の稼ぎだけじゃ厳しいでしょ？あははは」

「私も、妻にも同じこと言われてそうですよ。まったく・・・」

「いやいや、個人店とはいえ、二十年もあつて、こんなに常連さんに通つてもらえる」

スーパーなんて数少ないですよ！ね？あ、時間が！ではお先に失礼します」

休憩室の時計は、午後五時半を回っていた。

＊＊家庭教師の日＊＊

「カズちゃんへ冷蔵庫にご飯が入ってます。温めて食べてね。今日は先生来る日だからね」

一人っ子の和久は、両親が病院に勤務していて帰りも不定期なため、いつも首にカギをぶら下げた「カギっ子」だった。ちょうど一年前くらいに購入した高級住宅街の

広い一軒家に、小学三年生が一人で過ごすには広すぎる家だが、和久が入る部屋は、自分の部屋とトイレとお風呂、そして、このリビングのテーブルだけだ。

ちゃんとしたメモ帳に書かれた手紙と、温め終わって不要になったサランラップを一緒に丸めて

ゴミ箱に捨て、当たり前のように温めたご飯を食べた。

もうそんな暮らしが当たり前になっていて、数年前のように母親の陽子に寂しい素振りを

見せることもなくなっていた。

「ピンポン」

毎週土曜日は家庭教師の日で、毎週午後三時前後には太陽がやって来る。

「カズくん。こんにちは。さ！今日も頑張ろうか！」

元気な声で笑顔が爽やかな教師は佐藤健二という二十歳の全国的にも有名大学の二年生。

和久は、そんな健二の明るさにも大して表情を変えることなく「こんにちは」とお辞儀すると、

リビングから黙って陽子の用意したお茶菓子を手にして、自分の部屋へと続く階段を

すたすたと上がっていく。

「よっしゃ！ほな、やるか？まずは、前回の宿題見せてみ？・・・おう、よう分かつとるな！」

と、開いている教科書は小学五年生用のものだ。

毎週、元気で明るい健二と言葉数少ない和久の、まるで太陽と月がまじあう様な二時間が

あっという間に過ぎていく。

「ふー。今日はこの辺くらいまでやな？それにしても、やっぱカズくんはすごいなあ。」

ホンマに三年生かって思うわ」

「い、いえ。ありがとうございました。あ、あのこれ・・・」

勉強が終わると、用意されたおやつを食べる。というか、予め部屋には置いてあるのだが、

五分も経たずして、そんなことは二人の記憶からは外されるような感じだ。

そうやって、食べながら健二は一方的に色々喋っていた。大学の話や、地元の話や、自分の

友人や恋人の話など・・・今日もバームクーヘン片手に、サークルで入ったバトミントンに

ついて話していたが、その殆どに興味は持たなかった。

しかし、何も飽きもせず隠さず喋る健二に、自分のために気を使ってくれて話してくれていることを

感じている和久は、彼に好意を持っているようだ。

「バトミントン・・・したことないから」

「そっか。じゃあ、今度遊びにおいでや。いつも勉強ばっかじゃなあ。疲れるやろ？」

「いえ、スポーツ、苦手だから」

「大丈夫やて！楽しむことが大事なんやから。来たら俺が教えたるわ」

と、話していると健二のケータイが鳴る。

「あ、こんにちは。・・・そうですね。よろしくお願いします」
とだけ言うと、ケータイを直すと忙しく片付け始めた。

「あ、ほなまた来週な。次が詰つとったの忘れとったわ！

分からんとこあったらメールでもちようだいな。
って、今度しよな？バド。な？」

和久からしたら健二は嵐のように感じたかも知れないが、いつも玄関まで見送り、最後は必ず

「ありがとうございます」とお辞儀をするのだった。

「ぶるるぶるる・・・」

健二を見送り、玄関の鍵掛けたと同時くらいに家の電話が鳴った。

「はい、田口です・・・うん・・・大丈夫」

電話の相手が誰だか分かった瞬間、和久は居るはずもない玄関に視線を移して、

誰も居ない事を改めて確認した。

ヤクザ映画

「うおー！やっぱ血が騒ぐのー！今回ののは最高にオモロかったな！な？な？」

「そう？圭ちゃんの仕草の方がうちの生徒みたいで・・・そっちの方が面白いわ」

「じゃかしーわ！イテまうぞー！」

子供の様な気の強そうで弱そうな圭介と、真面目で大人しそうで気の強い美香。

外見はアンバランスだが、お似合い二人だ。

「それより、今日はいつものでいいんでしょ？」

「おう！お前のは美味いからな！」

「何言つてんの。カレーだったら二日三日もつからでしょ？」
その日は、圭介の家で晩ご飯を美香が作るようになっていた。

店先から元気な音楽が流れてくる。

「お前、買つて来いよ。サイフ渡しとくけんさ。俺、外でタバコ吸つとる」

「三月のまだ寒い季節なのに外でタバコなんて、相当好きなのね。ちゃんと吸殻入れあるとこで吸つてよね！」

「わーつとるわ！タバコは相棒みたいなもんじゃ。ま、お前の次に大切なもんじゃな」

「・・・なに言つてんの？都合良いわね。はい、買つてきます」

「はい、お待たせしました。あ、宮下先生じゃない？」

「あ。横川くんのお母さん？あれ？今日はお休みじゃないんですか？」

「そうなのよ。今日は急ぎよ、人手が足りないからって、まったく人使い荒いでしょ？」

あはは。で、今日はカレと一緒？」

「はい。日曜日で休みなんだから、たまには料理でも作れって煩くて・・・」

今日は女の子の日なのにですね。へへ」

「あら、今日は三月三日ね？忘れてたわ。それにしても幸せそうでふふふ。」

つて、ところで、丈太郎はまたご迷惑お掛けしてるんじゃない？」

会話しながらも手馴れた手つきでレジを商品たちが通過していく。
「いいいえ。クラスのムードメーカーで、私にもよく話しかけてくれるんです。」

先週もお姉さんと買い物に行ったって」

「そうなのよ。歳の離れた姉弟だから、お姉ちゃんも可愛いみたいで」

「今月で三年生も終わりますから寂しいですよ。けど、明日は大事なテストです！」

丈太郎くん勉強してますかね？」

「いえ、机の上はゴツチャゴチャで・・・まあ、たぶんいつも結果でしょうね。」

まったくあの子ったら・・・ってスミマセンね。親がこんなんだから。はい、三四五八円です」

「けど、お母さんも遅くまで大変ですね。はい、じゃあ五千円から」
「ふふ。もう五時でしょ？先生が本日最後のお客様よ」

＊＊西峰小学校職員室＊＊

「宮下先生、採点終わりそうですか？すみません、お先にお疲れ様です」

そう新人の美香に声をかけたのは、先輩の谷口ひとみだ。

「あ、ありがとうございます。もう終わりますから」

美香は月曜日に行ったテストの採点を行っていた。新人教師というのもあって、

初めての学期末で、優先順位の低い業務は後手後手へと回っていた。
「ああ、週明けに渡せばいいから放っておいたからなあ・・・いか

んいかん」

体育館でバスケットボールのクラブ活動が行われているものの、土曜日の午後というのは、生徒も帰宅し、学校も静かで、教師たちは自分の作業をせつせとなし、

美香は最後の一人になっていた。

西峰小学校の校舎の片隅には、職員室の前の廊下からも見える大きな桜の木が立っている。

満開になると、初めて見る誰もが一度、足を止めなくなるほど立派な一本桜で、

今年も例年通り、三分から五分程度開花していた。

ちょうど一年前に教師になったばかりの美香にとっては、どこか小さな心の支えになっていて、

葉桜になり、枯れてしまったあとも、時折、何かあると、その木に触れては聞こえない声で

「うん、がんばろう」と、呟いていた。

ガラガラガラ・・・

「せ、先生いいですか」

「あら、横川くん？まだ居たの？どうしたの？」

丈太郎は美香を確認するために目を上げてからは、終始、俯き加減の様子だったが、

初めのうちは、テストの結果が気になったのかな？なんて軽く思っていたが、

その異変に会話するまで美香は気付かなかった。

「あ、あの・・・」

美香の採点していた赤ペンが止まった。

「・・・ど、どうしたの？そんな暗い顔して。何かあったの？」

「じ、実は・・・昨日、音楽の前に体育館のトイレで」

と、丈太郎は、トイレでの話を美香に打ち明け始めた。

「なんで、あいつからそんなことされなきゃいけないんだ。もうあいつが怖いよ」

「え？何度も聞くけど、本当にあの田口くんにやられたのね？」

「そうだって言ってるじゃん！変なナイフが出てきて、持つところが青いナイフでー！」

たしかに丈太郎は、クラスのお調子者で冗談や可愛い嘘は付くが、その手の嘘は聞いたことがない。

それに何より、放課後は我先に校舎の門を駆け抜けるような、言わば、土曜の午後の学校とは

最も縁遠い丈太郎が、わざわざ誰もいなくなるまで待ったりするなどありえなかった。

多少の疑いはあるつつも、美香は、その話を信じたのと同時に、何とかこのことを

無事に収集しなければと、去年まで四年間学んできた教育学部の授業や、ゼミの教授の顔が頭を

瞬間的に過りながらも、必死に冷静を保とうとしていた。

「分かったわ、横川くん。先生、それとなく田口くんに聞いてみるから。」

もちろん横川くんのことと言わないから、ね」

「だ、大丈夫なの？本当にそんなことして」

「大丈夫よ。任せなさい」

とにかく美香は、丈太郎に心配させまいと必死に答えた。

つづく

続きはコチラから。

<http://clubtower2.blog22.fc2.com/blog-category-1.html>

（後書き）

最後まで読んでくださった方がいてくれれば、それだけで幸いです。
ありがとうございます。

あとがき

<http://clubtower2.blog2.fc2.com/blog-entry-1.html>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3332q/>

諸刃のサクラ

2011年1月26日07時03分発行